

博士論文審査及び最終試験の結果

学位請求者 保崎典子

学位請求論文 ムンサラット・ロッチ文学におけるカタルーニャ的特質について

審査委員（主査）西永良成

（副査）田澤耕

荒このみ

谷川道子

杉浦勉

《審査の結果》

本論文は従来スペインにおける1975年以降のフェミニズム作家のひとりとして取り上げられることの多かったムンサラット・ロッチ（1946-1991）の文学を、女性の観点のみならず、新たにカタルーニャの歴史の視点から総体的に読解する試みとして、その代表的長編小説5編すべての通時的分析を通し、とりわけ「女性」の立場からカタルーニャの歴史的記憶の諸相を再現してみせることにより、その隠された特質を見極めようとする論文であり、視点の独創性、分析の緻密さ、知見の斬新さなどにおいて、当初の研究目的がほぼ達成されていることが確認された。ゆえに、審査委員会は論文審査及び最終審査の質疑応答のいずれにおいても申請者の学識と力量を高く評価し、全員一致で申請者に博士（学術）の学位を授与することを評決した。

《論文の概要》

保崎氏の論文は、ロッチがあえてカタルーニャ語で書くことを選んだ『さらばラモーナ』（1972）、『さくらんぼの実るころ』（1976）、『すみれ色の時刻』（1980）、『日常オペラ』（1982）、『妙なる調べ』（1987）の5編の小説を久しく抑圧されてきたカタルーニャの歴史的経験の流れに則して再

読することにより、その特質と意義を抽出することをめざす。序と結びを除く全体は4章からなり、付録としてカタルーニャ語の歴史および言語地図などが加えられている。

第一章「カタルーニャの女の『内-歴史』」では、ラモーナという名を共有する祖母、母、娘の3代の女性を描いた『さらばラモーナ』を中心に、スペインの公の歴史が取り上げてこなかったカタルーニャの伝統的な女性の歴史が考察される。そして、ここで作者はこのカタルーニャの伝統的な女性の歴史と訣別し、これを乗り越えようとする意志をすでに固めていることが確認される。

第二章「自由獲得の戦い—ムンサラット・ロッチによる内戦の位置づけ」では、作者がスペイン内戦をどのように捉えていたかが考察される。そして、内戦時にすでに女性の自立の萌芽があると見なしていた作者が、内戦時の女性たちの戦いや愛をいかに記述しているのかが、とくに『さくらんぼの実る頃』と『すみれ色の時刻』に注目しつつ、多彩に論述されている。

第三章「後退—敗戦後のカタルーニャ」では、内戦に敗北し、フランコ体制の言語統一政策によって「他者の言語」を強要されたカタルーニャ人の政治・社会・文化状況の「後退」の内実がつぶさに検討される。具体的には、『さくらんぼの実るころ』の登場人物に見られる「亡命」の問題、『日常オペラ』の登場人物における過去の「書き換え」の問題、『妙なる調べ』の登場人物が体現する「ユートピア」思想の問題などが、作者によっていかに追体験され、内面化されることになったのかが、興味深く辿られている。

そして第四章「抵抗、挫折、解放—ムンサラット・ロッチ世代のカタルーニャ」は本論文の白眉ともいえるべき充実した章であるが、ここでは内戦における敗北のトラウマを引き継いでいるロッチと同世代の登場人物たちが、いかなる紆余曲折を経て真の解放に向かおうするのか、魅力的かつ説得的に記述されている。それによれば、最初の作品『さらばラモーナ』、『さくらんぼの実るころ』ではフランコ体制時における女性たちの抑圧された状況、その状況を乗り越えて「新しい女」「強い女」に変貌していく女性像の形成が看取される。つぎの『すみれ色の時刻』ではこの「新しい女」「強い女」というイメージが幻想にすぎなかったこと、そしてこれによってアイデンティティの危機を被った主人公たちが、あらたな解放の形式、「女性のエクリチュール」を模索せざるをえなくなったという悲劇的な過程が浮き彫りになる。そして最後の長編である『妙なる調べ』にいたって、カタルーニャ主義の活動を人間的に客観視できるようになっ

た作者に、ようやく自己解放の地平が望見できるまでの成熟が訪れたことが見きわめられる。

《審査の概要》

本学位論文の公開審査は書類審査を経て、本年11月7日におこなわれた。審査員から提出された評価・疑問は概略次の通りである。

・評価すべき点

- 1) カタルーニャ文学は日本でほとんど知られておらず、研究が皆無に等しいなかで、カタルーニャ語の独学など数々の困難を乗り越えて、このような力作論文をものしたこと自体、すでに高い評価に値する。
- 2) フラッシュバックの手法を駆使するロッチの小説の小説は、ときにその全体像を把握する妨げになるが、本論文は作品の通時的読解、時代的境界の設定および歴史的連続性の確定を図ったものであるから、読む者にロッチの文学の魅力と意義を明示してくれ、じっさいに彼女の作品を読んできたという気にさせる。
- 3) 本論文が文学論と歴史論を兼ねたものになっているがゆえに、たとえば、社会の弱者としての女性が、その弱者性ゆえにかえて、フランコ政権下での弾圧を逃れ、カタルーニャ語保持の力となりえたというような創見も少なからず見られる。
- 4) 本論文はカタルーニャ語表現のロッチ文学を解題することによって、さらに大きな観点から、今日の地球文学の状況を考察し直す契機となる刺激性と方向性を十分に示唆するものでもある。

・疑問点

- 1) 論文の題名にある「カタルーニャ的特質」なるものを、論者がどのように考えているのか明確に定義されていないために、立論の手續きに飛躍が生じる嫌いがあり、論者の主張がときに曖昧さを免れない。
- 2) ロッチの作品を通時的に読解する試みは文学論であるとともに「歴史論」にもなるという長所をもつが、このことと表裏一体の関係で、論述がところどころ「作品紹介」めいた印象をあたえる。その結果として、各論の充

実に比し、結論がいささか脆弱な観を呈することが惜まれる。

- 3) スペイン語ではなく、あえてカタルーニャ語を表現言語としたことにロッチの並々ならぬ覚悟と存在理由があったわけだが、この論文ではスペイン語とカタルーニャ語の違い、またカタルーニャ語の弾圧が実際にどれほどのものであったが必ずしも明確に描かれていないために、せつかくのロッチの言語的選択の重要性があまり伝わってこないことが惜まれる。
- 4) この論文では主題からして重要な前提となるべき、ナショナリズムやジェンダーの問題などに関する理論的な考察が排除されているために、テキスト解釈やカタルーニャの歴史認識がときに単純かつ皮相に流れる嫌いがある。

以上の評価すべき点および疑問点について、学位申請者に補足的な説明をうけ、審査員が審議した結果、長年の研鑽の成果である先駆的なこの論文にたいし敬意をもって高く評価し、博士（学術）の学位を授与することを決するとともに、保崎氏の今後の研究の可能性について大いに期待が抱けるという認識でも委員会は全員一致した。